

数値計算

京都大学大学院情報学研究科
大木 健太郎

連絡先: ohki@i.kyoto-u.ac.jp

第7回

- ・ 非線形方程式の数値解法
- ・ 代数方程式の数値解法 (Strum の方法)

本日の内容

❖ 非線形方程式の数値解法

❖ Newton法

❖ 反復法と収束

❖ 反復法の誤差解析

❖ 加速法

❖ 代数方程式の数値解法

❖ Sturmの方法

最適化問題と代数方程式のゼロ点

- 理学・工学や実社会において、**数理最適化**はよく用いられる。
 - (例) 適当な制約条件の下で、下の評価関数を最小化

$$S(x) = \frac{1}{2}(x - x_*)^\top A(x - x_*)$$

$$J(x) = \exp(\|x - x_*\|_2^2) - x^\top Ax$$

➡ **最適性の必要条件:** $\frac{\partial}{\partial x} S(x) = 0, \frac{\partial}{\partial x} J(x) = 0$

極値を精度よく求めることは、極めて重要

非線形方程式の数値解法

- 先ほどの極値を求める問題は,
 $f(x) = 0$ を満たす $x \in \mathbb{R}^n$ を求める問題

- 代表的な方法として, **Newton法**
 - 線形近似して解を逐次更新していく

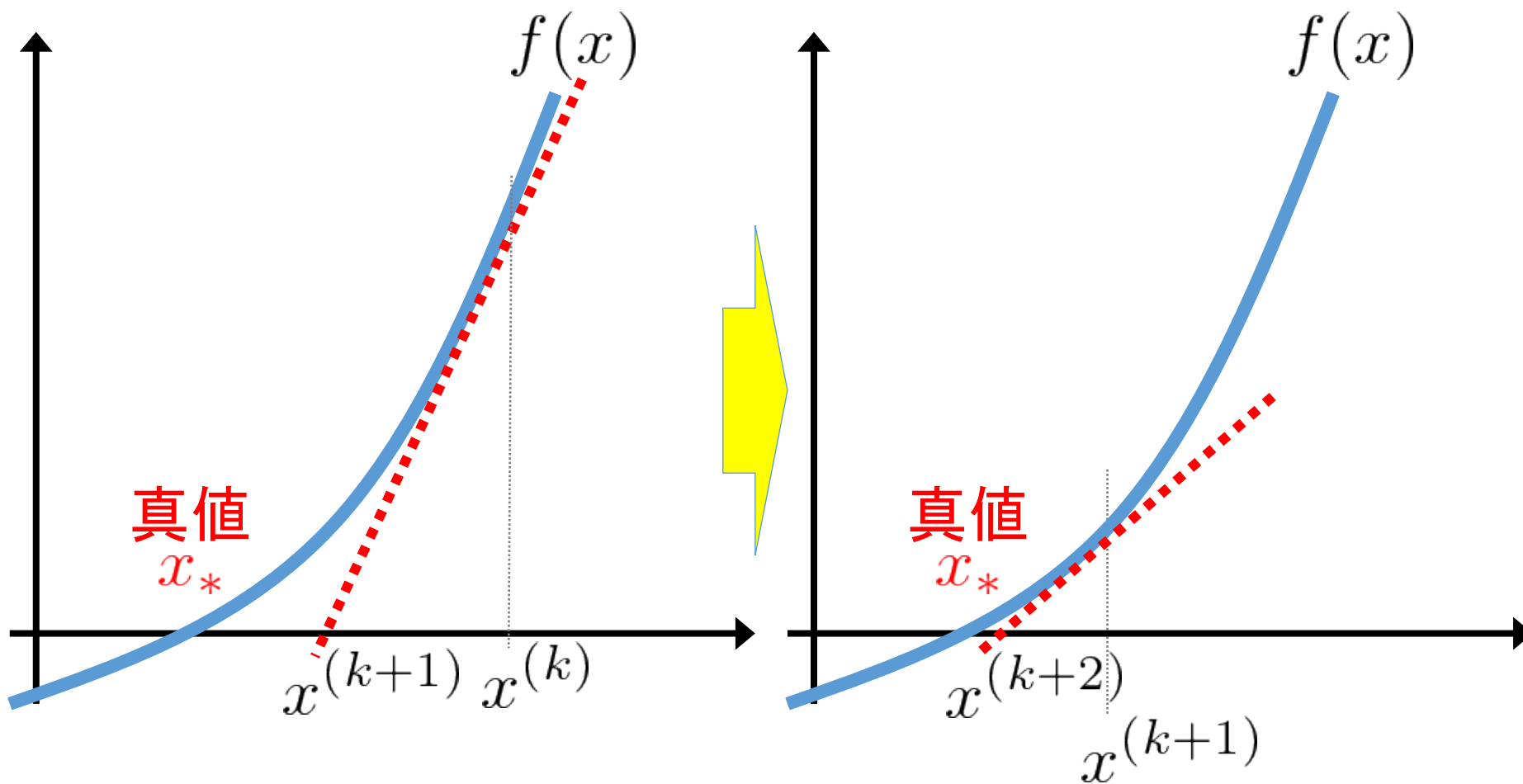
(例) 1次元の場合

$$f(x) \simeq f(x^{(k)}) + f'(x^{(k)})(x^{(k+1)} - x^{(k)}) = 0$$

$$\Rightarrow x^{(k+1)} = x^{(k)} - \frac{f(x^{(k)})}{f'(x^{(k)})}$$

Newton法の幾何学的解釈

非線形の問題 \Rightarrow 線形の問題にして徐々に近づける



Newton法で扱える問題の例

- 平方根を求める問題: $f(x) = x^2 - a$
- n 乗根を求める問題: $f(x) = x^n - a$
- 指数を求める問題: $f(x) = \log x - a$

n 変数方程式のNewton法

- n 変数だと n 次元:

$$f(x) := \frac{\partial}{\partial x} S(x) \in \mathbb{R}^n \quad f : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$$

Taylor 展開

$$f(x) \simeq f(x^{(k)}) + J(x^{(k)})(x - x^{(k)}) = 0$$

$$J(x) := \left(\frac{\partial f_i(x)}{\partial x_j} \right)_{ij} = \frac{\partial^2}{\partial x \partial x^\top} S(x) \quad \det J(x) \neq 0, \quad \forall x \in \mathbb{R}^n \setminus \{x_*\}$$



$$x^{(k+1)} = x^{(k)} - J^{-1}(x^{(k)}) f(x^{(k)})$$

Newton法の収束速度

- 前段の誤差の二乗に比例して小さくなる

$$x^{(k+1)} - x_* = J^{-1}(x^{(k)})O(\|x^{(k)} - x_*\|^2)$$

- J の正則性が成り立てば, 二次収束が保証されるので, 古くからよく使われている

反復法としてのNewton法

$\varphi(x) = \frac{1}{f'(x)}$ として, Newton 法は次の形で表せる

$$x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)}), \quad \phi(x) = x - \varphi(x)f(x)$$

なぜこの形か？

➡ $x = \phi(x)$ ならば, $x = x - \underbrace{\varphi(x)f(x)}_{=0}$

解が収束すれば, 方程式の根である

※ $\varphi(x) \neq 0$ は保証する必要がある

他の反復法による数値解法

$$x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)}), \quad \phi(x) = x - \varphi(x)f(x)$$

- Newton 法

各ステップで線形近似

$$\varphi(x) = \frac{1}{f'(x)}$$

- 線形逆補間法

初期値のみでなく第一ステップの値も用いる

$$\varphi(x) = \frac{x - x_0}{f(x) - f(x_0)}$$

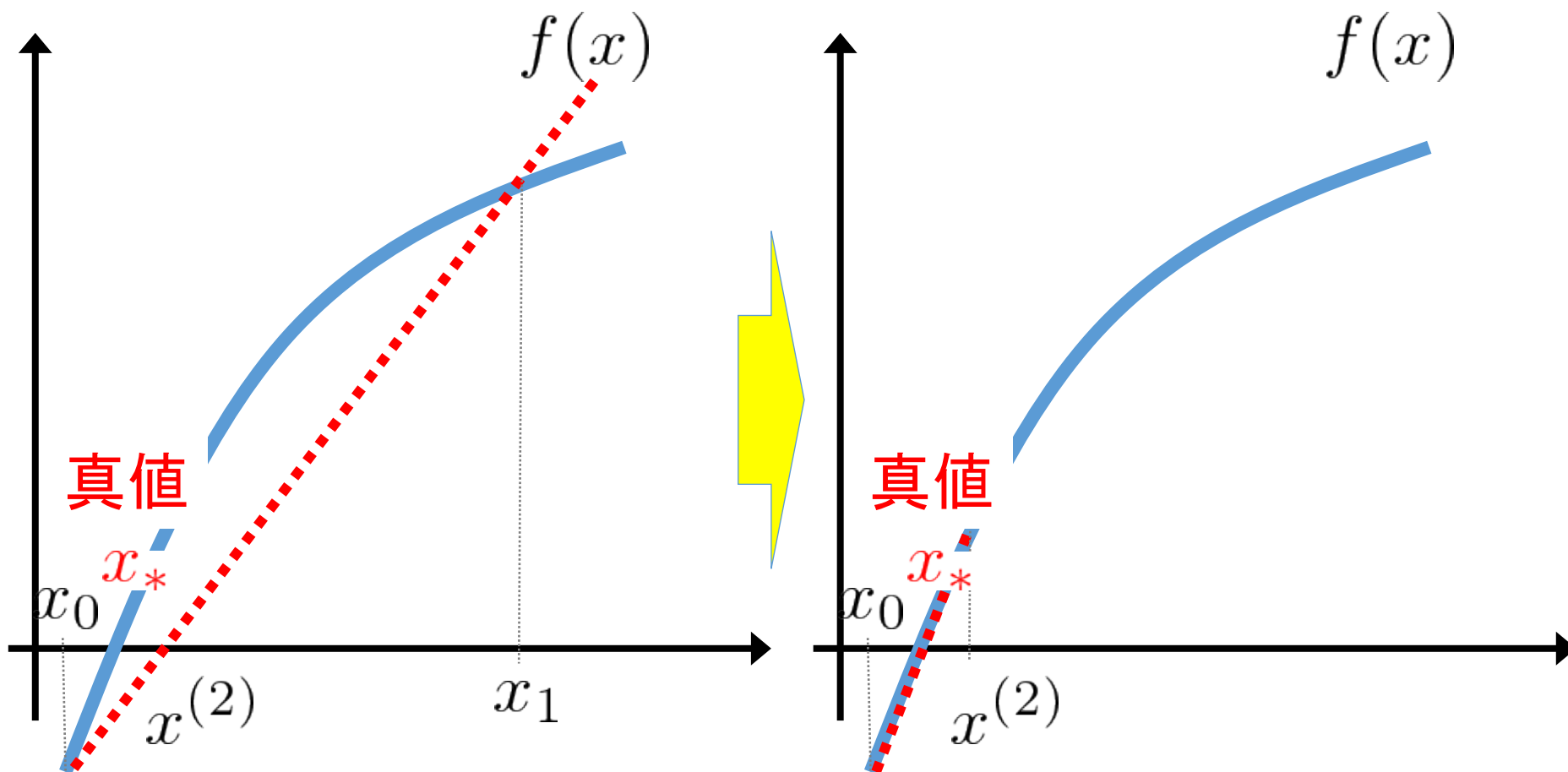
- von Mises 法

初期値の傾きをずっと使う

$$\varphi(x) = \frac{1}{f'(x_0)}$$

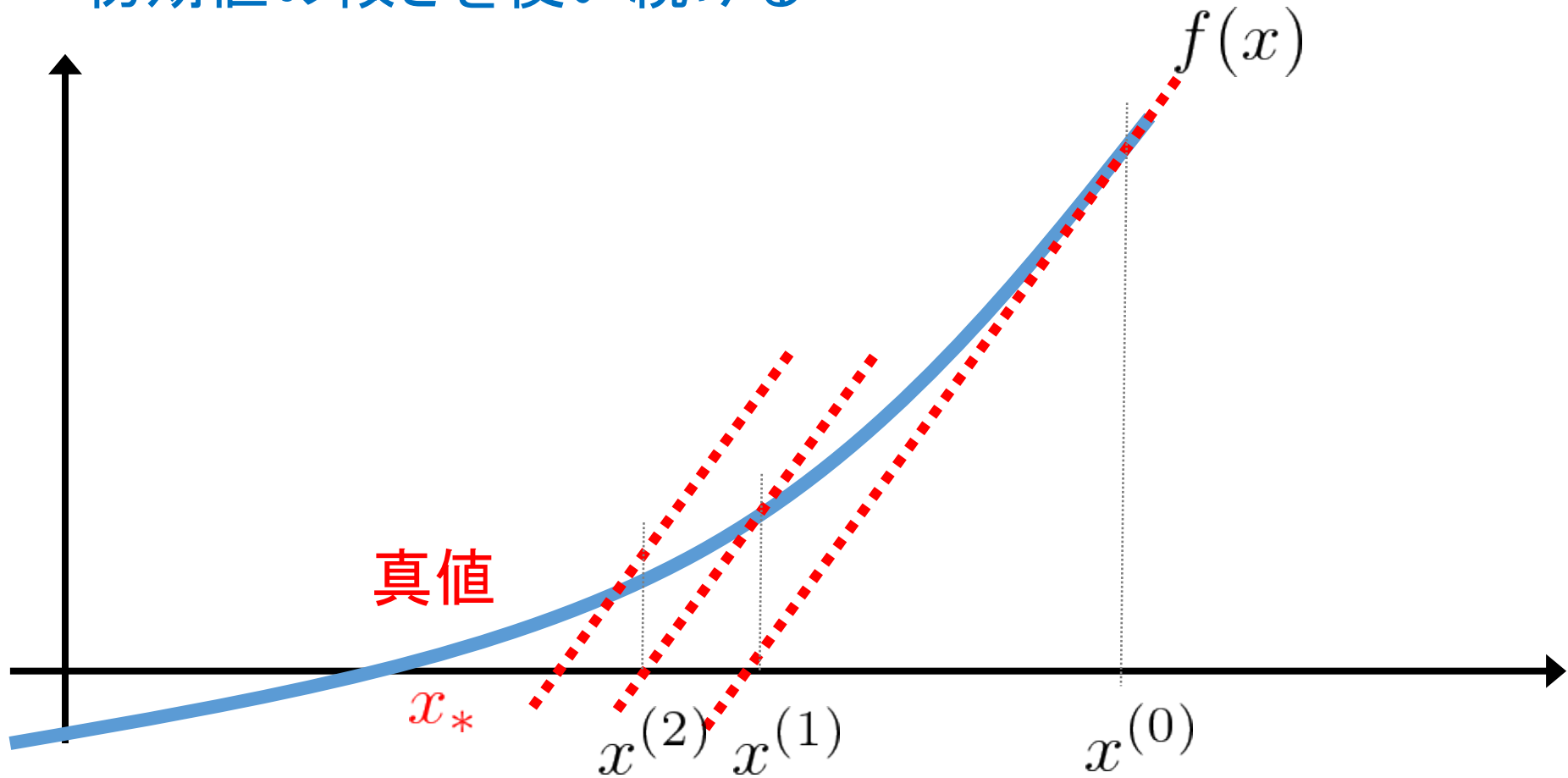
線形逆補間法の幾何学的解釈

$f(x_0)f(x_1) < 0$ となるペア $x_0, x_1 \in \mathbb{R}$ を見つけておく



von Mises 法の幾何学的解釈

初期値の傾きを使い続ける



本日の内容

❖ 非線形方程式の数値解法

- ❖ Newton法

- ❖ 反復法と収束

- ❖ 反復法の誤差解析

- ❖ 加速法

❖ 代数方程式の数値解法

- ❖ Sturm の方法

反復法の収束

- 反復法によって生成される数列が、求めたい解に近づかなければ意味がない

$$x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)})$$

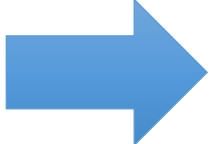
- 収束の議論は**縮小写像の原理**

縮小写像の原理(復習)

仮定

$$\forall x, y \in \mathbb{R}^n, \|\phi(x) - \phi(y)\| \leq q\|x - y\|$$

かつ, q は $0 < q < 1$

 $x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)})$ で更新される解は

$x = \phi(x)$ を満たす唯一解に収束

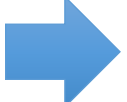
\mathbb{R}^n 全体で考えると, 多くの写像が縮小写像にならない

定義域を制限した縮小写像

- 非線形方程式の場合,
写像が縮小写像か否かは定義域にも依存する

$$x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)}) \quad \phi(x) = x^2$$

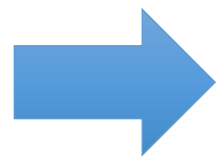
$$x, y \in K = [0, 0.3], \quad |\phi(x) - \phi(y)| \leq q|x - y|$$

 ϕ は $K = [0, 0.3]$ 上で縮小写像

縮小写像の原理(定理2.1)

仮定

- $K \subset \mathbb{R}^n$ は閉領域かつ $\phi : K \rightarrow K$
- $\forall x, y \in K \subset \mathbb{R}^n, \|\phi(x) - \phi(y)\| \leq q\|x - y\|$
かつ, q は $0 < q < 1$



$$x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)}), \quad x^{(0)} \in K$$

で更新される解は

$x = \phi(x)$ を満たす唯一解に収束

本日の内容

❖ 非線形方程式の数値解法

- ❖ Newton法

- ❖ 反復法と収束

- ❖ 反復法の誤差解析

- ❖ 加速法

❖ 代数方程式の数値解法

- ❖ Sturmの方法


反復法の誤差解析

丸め誤差なし $x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)})$

丸め誤差あり $y^{(k+1)} = \phi(y^{(k)}) + \epsilon^{(k)}$

丸め誤差

仮定 $\|\epsilon^{(k)}\| \leq \epsilon, k = 1, 2, \dots$


 $\|y^{(N)} - x_*\| \leq \frac{1}{1-q} \left\{ q^N \|\phi(x^{(0)}) - x^{(0)}\| + \epsilon \right\}$

教科書の評価

これは分からない……

反復法の誤差解析: 修正版

$$y^{(1)} - x^{(0)} = \phi(x^{(0)}) - x^{(0)} + \epsilon^{(0)}$$
$$\Rightarrow y^{(1)} - x^{(0)} - \epsilon^{(0)} = \phi(x^{(0)}) - x^{(0)}$$

 $\|\phi(x^{(0)}) - x^{(0)}\| \leq \|y^{(1)} - x^{(0)}\| + \epsilon$

$$\|y^{(N)} - x_*\| \leq \frac{1}{1-q} \left\{ q^N \left(\|y^{(1)} - x^{(0)}\| + \epsilon \right) + \epsilon \right\}$$

初期値, 事前情報(丸め誤差の大きさ), 第一ステップの値のみで評価可能

初期値の選択


- 反復法の収束は、適切な初期値の選択が重要

$$T_1 = \{y \mid \|y - x^{(0)}\| \leq \rho\}$$

仮定 $\|\phi(x^{(0)}) - x^{(0)}\| + \epsilon \leq (1 - q)\rho$

丸め誤差の大きさ


$$q^N \leq 1 \text{ より,}$$

 $\|y^{(N)} - x_*\| \leq \frac{1}{1 - q} \left\{ \|\phi(x^{(0)}) - x^{(0)}\| + \epsilon \right\} \leq \rho$

初期値の選択: 修正版

$$T_1 = \{y \mid \|y - x^{(0)}\| \leq \rho\}$$

仮定 $\|y^{(1)} - x^{(0)}\| + 2\epsilon \leq (1 - q)\rho$

 $\|y^{(N)} - x_*\| \leq \frac{1}{1 - q} \left\{ \|y^{(1)} - x^{(0)}\| + 2\epsilon \right\} \leq \rho$

よって, $y^{(N)} \in T_1, N = 1, 2, \dots$

何らかの先見的情報を用いて
初期値を真値の十分近くにとる工夫が大事

本日の内容

❖ 非線形方程式の数値解法

- ❖ Newton法

- ❖ 反復法と収束

- ❖ 反復法の誤差解析

- ❖ **加速法**

❖ 代数方程式の数値解法

- ❖ Sturmの方法

収束の速度

反復法 $x^{(k+1)} = \phi(x^{(k)})$, $x^{(0)} \in \underline{K} \subset \mathbb{R}^n$
有界閉集合

仮定 ϕ は $(K, \|\bullet\|)$ 上で縮小写像

→ 収束先を x^* とする

定義: 収束の速度

• $\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{\|x^{(k+1)} - x^*\|}{\|x^{(k)} - x^*\|} = \mu$ → 線形収束, 1次収束

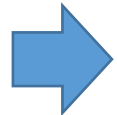
• $\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{\|x^{(k+1)} - x^*\|}{\|x^{(k)} - x^*\|} = 0$ → 超1次収束

• $\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{\|x^{(k+1)} - x^*\|}{\|x^{(k)} - x^*\|^p} > 0$, $p > 1$ → p 次収束

Newton 法は真値の
近傍で2次収束

Aitken の加速法

少ないステップで収束した方が嬉しい

 **加速法**: より速い収束列を作る方法

簡単のために $n = 1$ とする

$\{x^{(k)}\}$: 収束列 (収束先: x^* , 線形収束)

$$y^{(k)} = x^{(k)} - \frac{(x^{(k+2)} - x^{(k+1)})^2}{x^{(k+2)} - 2x^{(k+1)} + x^{(k)}}$$

で生成する列 $\{y^{(k)}\}$ は元の収束列よりも速くに x^* 収束する:

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{y^{(k)} - x^*}{x^{(k+2)} - x^*} = 0$$

※ 証明は [山本哲朗: 数値解析入門, p. 74, サイエンス社(2003)] 参照

関数の微分を必要としないアルゴリズム

関数 f が微分できない場合, Newton 法は使えない



Steffensen 反復法: $x = \phi(x)$ の根を求めるアルゴリズム

$$\phi(x) = x + f(x) \text{ として}$$

$$z^{(k+1)} = \phi(\phi(z^{(k)})) - \frac{(\phi(\phi(z^{(k)})) - \phi(z^{(k)}))^2}{\phi(\phi(z^{(k)})) - 2\phi(z^{(k)}) + z^{(k)}}$$

- ✓ Aitken 加速と似ているが, Aitken 加速が発散しても初期値の選び方によって収束
- ✓ 収束速度はNewton法と同程度

本日の内容

❖ 非線形方程式の数値解法

- ❖ Newton 法
- ❖ 反復法と収束
- ❖ 反復法の誤差解析
- ❖ 加速法

❖ 代数方程式の数値解法

- ❖ Sturm の方法

代数方程式

- 代数方程式

- 多項式: (例)
$$f(x) = \sum_{j=0}^m a_j x^j$$

- 代数方程式:
$$f(x) = 0$$

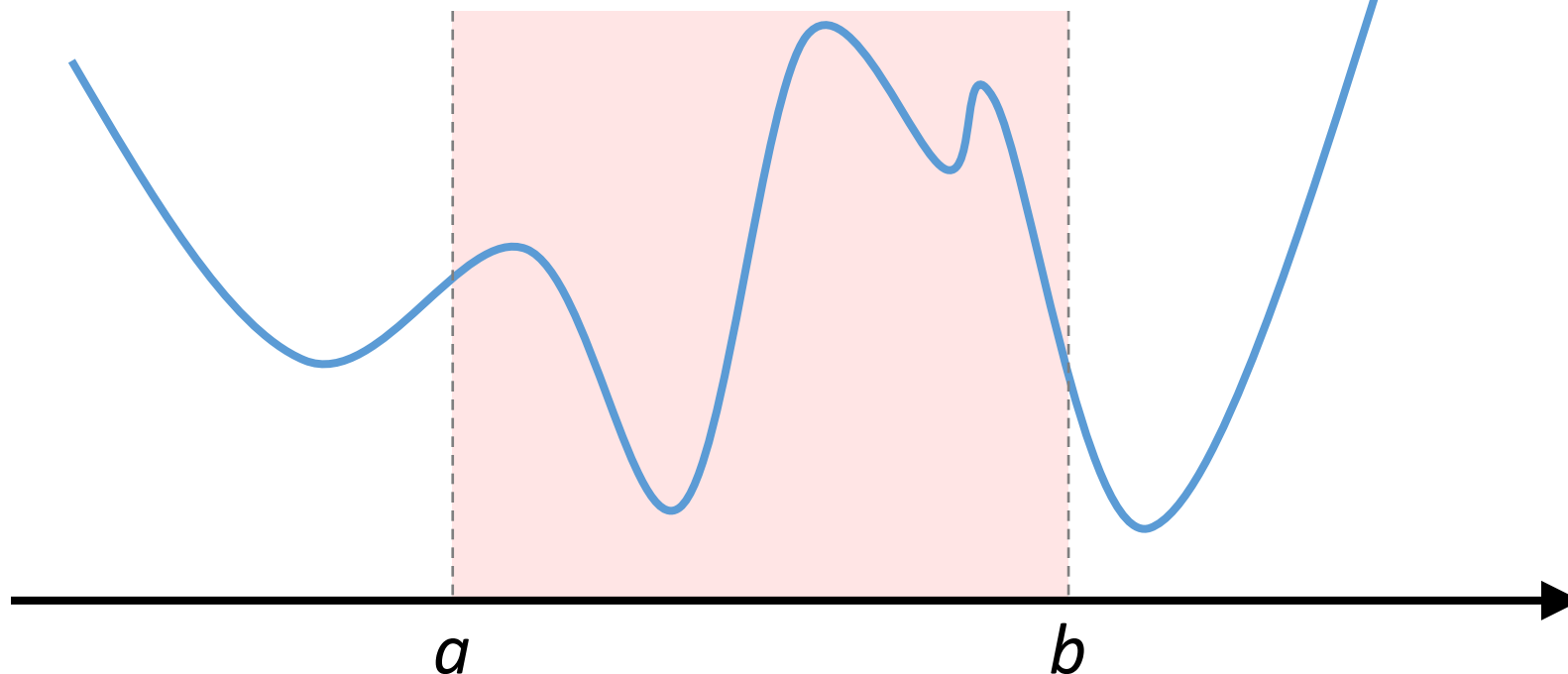
- 根の存在が保証され, 根の数も保証される
- 非線形関数の近似して議論できる

代数方程式の根に関する数値計算法

- ある指定した範囲に根がいくつ存在するか
⇒ **Strum の方法**
- 複素数の根を求める
⇒ **Bairstow-Hitchcock 法**
- 全ての根を求める
⇒ **DKA 法 (Durand-Kerner-Aberth法)**

根の数を調べること

- 最適化の問題では、パラメータを動かせる範囲が制限されることが多い
- 範囲内に極値が何個あるか調べることは重要



Sturm列

$[a, b], \quad a, b \in \mathbb{R}, a < b$

定義 (Sturm 列)

実係数多項式の列 $f(x), f_1(x), \dots, f_l(x)$ が区間 $[a, b]$ において **Sturm 列** であるとは, 次の4つを満たすことをいう.

- (1) $x \in [a, b], f_k(x) = 0 \Rightarrow f_l(x) \neq 0, k, l = 0, 1, \dots, l-1, |k-l| = 1$
- (2) $f_k(x_0) = 0 \Rightarrow f_{k-1}(x_0)f_{k+1}(x_0) < 0, k = 1, \dots, l-1$
- (3) $(f_l(x) > 0, \forall x \in [a, b])$ or $(f_l(x) < 0, \forall x \in [a, b])$
- (4) $f(x_0) = 0 \Rightarrow f(x_0)f_1(x_0) > 0$

Sturm列の例

次はSturm列の定義を満たす

$$f(x) = x^2 + a_1x + a_0, \quad a_0, a_1 \in \mathbb{R} \setminus \{0\}, a_1 \neq 2a_0$$

$$f_1(x) = 2x + a_1$$

$$f_2(x) = a_0 - \frac{1}{4}a_1^2$$

※ f は重複する根を持たないことに注意

Sturmの定理

仮定

実係数多項式の列 $f(x), f_1(x), \dots, f_l(x)$ が区間 $[a, b]$ において Sturm 列であり, $f(a)f(b) \neq 0$.

$N(x)$: $x \in [a, b]$ において $[f(x), f_1(x), \dots, f_l(x)]$ を左から見たときの符号反転の数

定理2.2 (Sturmの定理)

$f(x)$ の区間 $[a, b]$ に存在する零点の個数は,

$$n_0 = N(a) - N(b)$$

符号反転回数の数え方の注意

- 次の場合は, 一回反転したものと数える

$$\begin{array}{c|c|c} f_{k-1}(x) & f_k(x) & f_{k+1}(x) \\ \hline + & 0 & - \end{array}$$

Sturm列の生成法

1. 多項式 f は区間 $[a, b]$ で重根を持たないものとする
(Sturm 列の条件(1)を満たすため)
2. まず微分し, 1つ目の多項式を作る
3. f を f_1 で割り算し, 剰余のマイナスを f_2 とする.
4. 以降, f_k を f_{k-1} で割り算し, 剰余のマイナスを f_{k+1} とする.
5. $f_l(x) = \text{非ゼロの定数}$ になったら終了

$$f(x) = x^2 + a_1x + a_0, \quad a_0, a_1 \in \mathbb{R} \setminus \{0\}, \quad a_1 \neq 2a_0$$

$$f_1(x) = f'(x) = 2x + a_1$$

$$f_2(x) = \underbrace{\left(\frac{1}{2}x + \frac{1}{4}a_1 \right)}_{g_1(x)} f_1(x) - f(x) = -a_0 + \frac{1}{4}a_1^2$$

次数を下げるようにする

重根のある場合のSturm列

$$f(x) = (x + 1)^2(x - 5) = x^3 - 3x^2 - 9x - 5$$

のSturm 列を計算(重根の場合)

Scilabコード例

```
x = poly(0,'x');  
f = x^3 - 3 x^2 - 9 x -5;  
f1 = 3 x^2 - 6 x - 9;  
[f2, g1] = pdiv(f, f1);  
f2=-f2;  
[f3, g2] = pdiv(f1, f2);
```



$$f_2(x) = \frac{1}{8}(x + 1) \neq \text{定数}$$

$$g_2(x) = -\frac{9}{8}x + \frac{3}{8}$$

$$f_3(x) = 0$$

重根のある場合のSturm列


$$\tilde{f}(x) = \frac{f(x)}{f_2(x)} = 8(x+1)(x-5) = 8x^2 - 32x - 40$$

のSturm列を計算(重根の場合)

Scilabコード例

```
x = poly(0,'x');  
f = 8x^2 - 32 x - 40;  
f1 = 16 x - 32;  
[f2, g1] = pdiv(f, f1);  
f2=-f2;
```

Sturm列


$$\begin{aligned}\tilde{f}(x) &= 8x^2 - 32x - 40 \\ \tilde{f}_1(x) &= 16x - 32 \\ \tilde{f}_2(x) &= 72\end{aligned}$$

Sturmの方法

- Sturm の定理を使って,
- 区間 $[a, b]$ を与えて, 根の数を調べる
- 区間 $[a, (a+b)/2], [(a+b)/2, b]$ の根の数を調べる
- どんどん2分割していき, **根が一つしかない区間を十分小さくして, その区間内の適当な値を根の近似値として採用する**

Sturmの方法: 具体例

- $f(x) = x^2 - 1x - 2 = 0$ を求める (区間 $[-10, 10]$)

- Sturm 列

$$f(x) = x^2 - 1x - 2$$

$$f_1(x) = 2x - 1$$

$$f_2(x) = 2 + 0.25 = 2.25$$

- 区間 $[-10, 10]$ 内の根の数

$$[f(10), f_1(10), f_2(10)] = [88, 19, 2.25] \Rightarrow N(10) = 0$$

$$[f(-10), f_1(-10), f_2(-10)] = [108, -21, 2.25] \Rightarrow N(-10) = 2$$



$$n_{[-10, 10]} = N(-10) - N(10) = 2$$

Sturmの方法: 具体例

- 区間を2分割して, 根の数を計算
 - 区間 $[-10,0]$ の根の数 $n_{[-10,0]} = 1$
 - 区間 $[0,10]$ の根の数 $n_{[0,10]} = 1$
- 再び区間を2分割して, 根の数の計算を繰り返す

$$[f(10), f_1(10), f_2(10)] = [88, 19, 2.25] \Rightarrow N(10) = 0$$

$$[f(0), f_1(0), f_2(0)] = [-2, -1, 2.25] \Rightarrow N(0) = 1$$

$$[f(-10), f_1(-10), f_2(-10)] = [108, -21, 2.25] \Rightarrow N(-10) = 2$$

次回の講義予定

- 代数方程式の数値解法